青灣茶話　附録

青灣茶話附錄目錄

團茶七要之具

湯提點

風爐（フロ）

茶盞（チヤワン）

帋（チヤノ）囊（フクロ）

茶（チヤ）盤（バン）

烏府（スミトリ）

火筴（ヒバシ）

品局

闘茶の要具先ハ七種あり湯提點。風炉。茶盞の類ハ三篇にあらはせり帛嚢ハ茶を入るゝ茶経に乃せたり茶磨鳥府大筴ハ茶あつかふ器なり品局ハ大かた七種をおさめおくべきほどのものにて茶経ハ茶篇にあらはせり

闘茶新式 小引

闘茶の起りしをたづぬるに宋朝にはじまる唐庚が闘茶の記范希文が闘茶の歌あり又闘茶を建人茶戦といふよしいへるより范氏歌に曰其間品第胡能欺十目視而十手指といへるによりけふ香合の式に擬して今新式を著はすこしてその闘茶といふハ

人集りいろ／＼の茶を持寄りて烹出し其しなを定るを
賞せるなりけりつゞくさして式あることゝ見へされども
いまだなかん雅俗の中ニ事とならず世に知りたれバ定りたる式
あらざるか余が茶学者より堅く書を捺備せざれバ是
書と作ざるものか闘茶家當流ことむつかしき茶と云
ものありて勝劣の札を入て勝負を定めし事ありとぞ
宗旦老人こそハ茶ハ歌舞伎(カブキ)ごとくなるものとて児戯(ジゲ)
に似ておとなしからざる事と咲禁(ワライイマシメ)たり然るに近来之茶
流の徒(トモガラ)茶歌舞伎とくして茶の伎鬮(ホウフク)書べきなるべく申へ
此闘茶を遊戯の外に取て児戯に類し高雅の士茶門

の為に教べきにあらざるはあらざれ

闘茶通例

○凡水一合に茶の目一銭目と定
○茶盞(チヤワン)ハ黒色のものを用ゆべし此事茶譜ニ載たり此
茶色を見えざるよしなり
○識(コロミ)に茶を明識(メイシ)と気付候ことをとらし飲むる
を瞞(アンミ)揺と云なり
○凡茶一盞ハ二勺(シヤク)入るべし一合の水を五盞にわけべし連
中十人ならバ水二合茶二銭目にて十盞にわかつべし始
よりの云ふ如く一合を云五盞七盞なりとも見合べし

茶をかく飲しむがよし

○茶を点せし人を茶頭といふ茶を烹たる人を喝府といふ茶飲連中を班列（ハンレツ）といふ是を脾といふ勝負を第（ダイ）匙（ヒ）といふ記録を書く人を録事といふ勝ハ勝負ハ劣といふ

○闘茶飯後に催すとも必菓子をすゝむべからず當の数奇者はよく此事あれ其数ハいづれも悪し蒸菓子乾菓子の類を用ゆべし香あるも茶味を色をうばひて悪し菓ならず嘗れ菓子ハ渇を止むゆへ茶を飲に悪し菓子を喫して後必盥漱（テアラヒクチスヽグ）べしさなくざれハ茶味悪し

○茶のかけ目多の分律を定むといへとも烹（ニル）时遅速緩

急あるは香味ちがふ故に明儀と勝負と烹（ニル）かげんふるゝへど悪しかゝるゆゑを用ゆべし同く此府の役をするしとれ香の吹かげんよりもいよしがるし

○茶盞ハ人数ほどより一盞に茶をつぎわたれべし次第遅に至るまで濃淡（ノウタン）前後ありて悪し茶盞茶盤はそろへの世わし屋より次第にまくれるべし

○茶瓶ハ水二合を受べきものを十箇ほどもおくべし或ハ烹さ士ハ三四箇ほどひに洗ひ用ひと替しうむべどこそ能様用しかるもとぞしかれば
余中夏ま烹茶瓶の色にかゝりしの
瓶又ハ汲ほどを一二目斗くらへよりハつへぶかゝりて割知やし
あとつかるゝ須まやりそれしや闘茶の前あれんか茶あひ志

あらしにあるとかくあくざかゝるにてせしものか如京かくらへし
十ケの余るもくつゝよせしりれなり今も希なり

闘茶式

闘茶の小牌(シハイ)を作りて先ず客の東へ此よし諸し書て
各自思の茶の茶と揚て集り明斜の人に授け手附列座
行人まくを茶一品つくるへし人数十人にかぎる或八二人
四人六人八人偶数なるべし茶一品と人数によりて五例の
ごとくうけ目を定め紙に包て中に茶の名と栗ゝの号と
を書付畳拾いまゝておく香合の式のごとし包紙の表には
茶の名さく人数かし茶を添くうち混いつまでも一包
を煎じあふべし是をたてゝのむ次にあるとたゞ一ヶ
定む二瓶斑列(ザチウ)喫し終てたよしと答てたの牌左よしと
答て右の牌(フダ)をあるへしいつとも牌左右の文字かくかはんかな
は下へ伏してあるの斑列の茶かくらく記事の人むしさうんて
記録なるべし左胴(サタン)(カタウド)のさ方と勝と定て捺(テン)を引(カク)べし記録
の式左のごとし済て左右一より五に至る茶の品十品く

闘茶第品(ダイヒンノ)記

左一　勝　朝日山(アサヒヤマ)　茶主　清泉子

某　某　某　某　某

右一　負　棣棠(ヤマブキ)　茶主　文山子

某　某　某　某

左二　負　　玉蘭　　茶主英川子
　某　某
右二　勝　　仙霊　　茶主青嶺子
　某　某　某　〻　〻　〻　〻
左三　勝　　花橘　　茶主翠嵐子
　某　、　〻　〻　〻　〻
右三　負　　輪違　　茶主幽芳子
　某　〻　〻　〻
左四　持　　高尾　　茶主紅旭子
　某　〻　〻　〻　〻
右四　持　　翠鳳　　茶主霊川子

左五　負　　薄葉　　茶主竜洞子
　某　〻　〻　〻　〻
　某　〻
右五　勝　　武夷　　茶主陳岳子
　某　〻　〻　〻　〻　〻　〻　〻　〻
支干月日　　於某亭小集
　　　　明府　某

茶嚢紙畳摺之図

同開之圖

此紙くゝりけし所を墨にて当時のごとくさら紙中にてつく
紙のゝくをさゝ乙みをとくべし

通仙(ツウセン)式

此闘茶ハ組香の式に擬(ギ)してかつくをしめ明(?)ニ盞股
賭指とは六名をかくしてさしもらすをいふ
賭物ニ壺以上云盤を用ひて云盤通仙靈(スト)ニ云終に因て名つく

茶三種　一　二　三　各二嚢つゝ以上六嚢

右三種の茶量目人數にしたがひ定めて二嚢つゝしらへおき
め一二三と記り烹おし班列(ザチウ)に飲しめ終りてのち一二
三の名を書しおきとうしく書て客嚢に入れ混ぜつゝ
よりおよりとも煎しおき是を附從客各飲みて牌をとるべし
尚わかれと符とて牌ハ折居に入おして一二三の書付をとし
て牌を納べし坂とりおし纏筆に絶せしむべし

折居圖

牌之圖

一	龍焙
裏	表

牌表記

龍焙　鳳團　露芽　雲花　清神　逼仙　素濤
白雪　雲脚　仙掌　以上十品牌數三十枚十客用之

右のことく表示し茶牌は一二三とかくへし玉川式の時ハ一二三客と四枚て十客の用四十枚なり

通僊弟品記

茶名　一　冬梅
　　　二　一ッ山
　　　三　棣棠

某 龍焙	二	三	一	皆
某 鳳團	一	三	二	一
某 露芽	三	二	一	一
某 雲花	一	二	三	無
某 清神	二	三	一	皆

支干月日　於何齋小集

茶主　某

明府　某

玉川式

此式を玉川と号るもの盧仝(ロドウ)が名によれり七盌不得喫(スヿ)といふによれり此式三盌聴松四盌うち一盌ハ此式小なくさ

さの之周く来り喫セしむるの一盌あるハ是を玉川式と云替なり

茶四両　一二嚢　二日　三日　客　一嚢

右明試三両煎し却し次列飲後く収暗摘四嚢ちら混て

いづれもうちありとも煎しおくおのづらしで明試ありち

茶一両入れは是をよく味あらくし煮を務とすべし

為すり従来の例に倣し茅両花に八抹テン二畫あり一人前り八

三抹ともすべし従猿の書式を通従式に倣し

青灣茶話附録終

大枝先生編述

先出　貝盡浦の錦　哥仙貝源氏貝及諸国名貝評注并貝合図式

嗣出　雅遊漫録　七冊　書画詩歌管絃及茶器玩之具或古器備名画奇石盆栽等解之

寶暦六年丙子春三月出來

浪華書坊　渋川清右衛門

大賀惣兵衛　仝梓